

ルッキズムの緩和

3年4組9番 クラーク咲莉エマ

keyword 『ルッキズム』 『広告』 『潜在意識』

1. はじめに

私は先人の知恵を未来に届けるゼミでルッキズムについて探求した。

探究しようと思ったきっかけは、夏休みにカナダに帰省した際に街にある広告やソーシャルメディアで出てくる広告の内容が大きく違うと感じたためだ。日本だと脱毛や整形、ダイエットサプリなどの見た目を変えるものやコンプレックスを刺激するような物が多く、それらの物をポジティブに宣伝しており、実際に小学生が整形している動画では、賞賛の声がほとんどで、日本の整形に対する考え方が大きく現れていた。それに比べてカナダでは公共の場である電車や街中の広告はもちろん規制のゆるいインターネット内でもそのような広告を見ることが少ない印象があった。その差は、日本では日常的に目にする場で見た目のコンプレックスを刺激する物が多いために潜在意識の違いが出ているのではないかと考え、探究のテーマにすることにした。

2. 序論

現代社会において、外見が個人の評価や機会に影響を与える現象はますます顕著になっている。ルッキズム、すなわち外見至上主義は、特定の外見基準に基づいて人々を評価し、差別する行為である。この現象は職場、教育、メディア、さらには日常生活においても広く見られる。

教育や職場などで、能力や人柄などとは無関係な「外見」が評価基準に含まれてしまう状況があると私は考えている。たとえば、学校や職場での選抜・評価プロセスにおいて、容姿が直接的には関係しないにもかかわらず、外見が考慮される場合がそうではないだろうか。これは、見た目による偏見や先入観が、他者の評価や機会の平等を損なう原因になるため、差別の一形態とされる。

西倉実季(2021)は、論文の中で「不必要な外見評価」が、社会全体に深刻な影響を及ぼすと指摘している。外見が評価基準に入ることによって、外見が美しくないと言われる人々が不当に不利な立場に置かれるだけでなく、個人の實力や人格に対する公正な評価が妨げられるため、真の平等が達成できないとされている。この視点から、ルッキズムは考え方だけでなく、差別的な行動の一部でもあると理解した。

またHyemin Lee, Inseo Son, Jaehong Yoon & Seung-Sup Kimの論文(2017)では、美容意識の高い韓国では、ルッキズムが健康状態に影響を与えているとしている。(図1、図2)

Table 2 Distribution of study population and prevalence of poor self-rated health at follow-up and reporting patterns of appearance discrimination among emerging adults in Korea, 2005–2013 (N = 2,973)

	Distribution N (%)	Poor self-rated health [†]		Appearance discrimination ^{**}				P [†]
		N (%)	P [†]	Never N (%)	Repeated N (%)	Incident N (%)	In error N (%)	
Sex			<0.001					<0.001
Male	1,765 (59.4)	87 (4.9)		1,539 (87.2)	26 (1.5)	92 (5.2)	108 (6.1)	
Female	1,208 (40.6)	141 (11.7)		974 (80.6)	48 (4.0)	81 (6.7)	105 (8.7)	
Age			<0.001					0.034
Group I	1,659 (55.8)	159 (9.6)		1,378 (83.1)	49 (3.0)	110 (6.6)	122 (7.4)	
Group II	1,314 (44.2)	69 (5.3)		1,135 (86.4)	25 (1.9)	63 (4.8)	91 (6.9)	
Change of BMI ^{***}			0.005					0.041
No change	2,348 (79.0)	162 (6.9)		2,003 (85.3)	56 (2.4)	135 (5.8)	154 (6.6)	
Toward underweight	126 (4.2)	18 (14.3)		110 (87.3)	1 (0.8)	3 (2.4)	12 (9.5)	
Toward overweight/obese	199 (6.7)	17 (8.5)		156 (78.4)	8 (4.0)	18 (9.1)	17 (8.5)	
Toward normal	300 (10.1)	31 (10.3)		244 (81.3)	9 (3.0)	17 (5.7)	30 (10.0)	
Residential area			0.461					0.837
Metropolitan area	2,402 (80.8)	180 (7.5)		2,033 (84.6)	62 (2.6)	138 (5.8)	169 (7.0)	
Rural area	571 (19.2)	48 (8.4)		480 (84.1)	12 (2.1)	35 (6.1)	44 (7.7)	
Baseline health status			<0.001					0.038
Good	2,788 (93.8)	185 (6.6)		2,370 (85.0)	67 (2.4)	159 (5.7)	192 (6.9)	
Poor	185 (6.2)	43 (23.2)		143 (77.3)	7 (3.8)	14 (7.6)	21 (11.4)	

図1

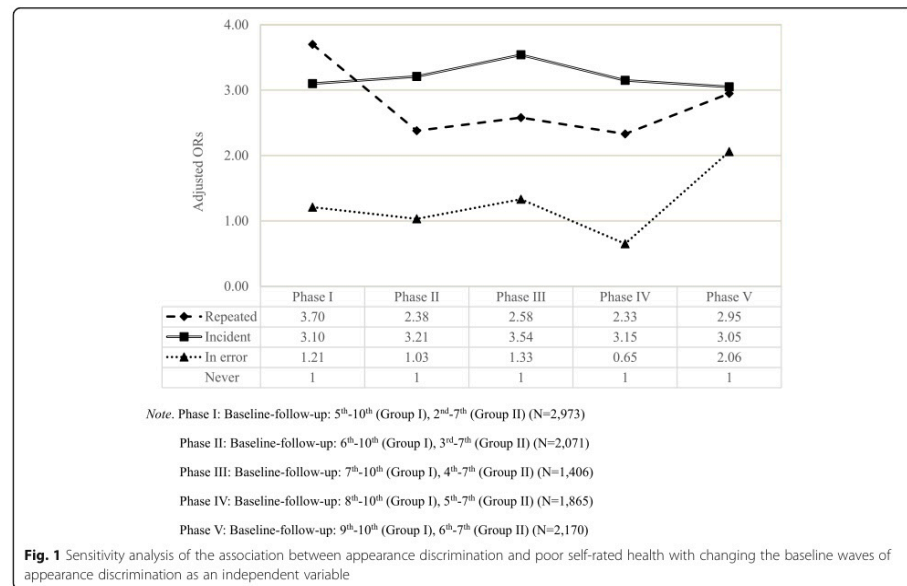


図2

カナダでは近年、外見に基づく差別や偏見、いわゆる「ルッキズム」を改善するための取り組みが進んでいる。多様な美を受け入れる姿勢が社会全体で広がりつつあり、個人の個性や内面的価値が重視されカナダ政府や教育機関では、メディアリテラシーやセルフエスティーム（自己肯定感）向上のためのプログラムが展開されており、特に若年層に対する影響が顕著である。

一方、日本では美容意識が非常に高く、見た目に関する規範や理想が根強く存在している。メディアや広告によって提示される美の基準が社会全体に浸透しており、特に若年層の間で外見に対するプレッシャーが強くなっている。例えば、就職活動における見た目の重要性や、メイクや服装に対する社会的期待が存在するため、日本では美容に関する消費活動も活発である。

ここでルッキズムの改善意識の高いカナダと比較的美容意識の高い日本の潜在意識の差を比較し環境がどのような影響を与えるのかを調査した。

3. 本論

調査では、カナダと日本の高校生を対象に、外見や美容に関する意識、及び社会から受ける影響についてのアンケートを実施した。主な質問項目は以下の通りである。

- 1.外見に対する意識：自分の外見にどの程度自信を持っているか。
- 2.美容行為の頻度：日常的にメイクやスキンケアを行う頻度。
- 3.社会からのプレッシャー：外見に関する社会的期待やプレッシャーを感じるか。
- 4.多様な美の認識：多様な美の概念にどの程度賛同するか。
- 5.自己肯定感と外見の関連：自己肯定感に外見がどの程度影響するか。

調査結果から、カナダと日本では外見に関する意識や美容行為の傾向に明確な差が見られた。

まず1つ目に外見に対する意識について、カナダの回答者は「自分の外見に自信を持っている」と答えた割合が日本よりも高く、逆に日本では「自分の外見に対する自信がない」と答えた割合が多く見られた。この差異は、カナダで進む多様な美に対する理解の浸透や、ルッキズムへの改善意識が背景にあると考えられる。

2つ目の美容行為の頻度について日本の回答者は、メイクやスキンケアを日常的に行う割合が非常に高く、特に「社会的に適切とされる外見」を保つために美容行為を重視していると回答する人が多くいた。カナダでは、外見を重視しないことが自己表現の一部と捉えられているため、美容行為が必要以上に行われない傾向が見られた。

3つ目に社会からのプレッシャーについて日本では、社会的期待やプレッシャーにより美容行為を行う人が多く、特に職場や就職活動において「見た目の重要性」を感じるという回答が多く見られた。一方、カナダの回答者は、多様な美の価値観の浸透により、社会からの外見に対するプレッシャーが少ないと感じる傾向が見られた。

最後に多様な美の認識についてカナダでは、多様な美に対する意識が日本よりも高く、外見の多様性が受け入れられる社会環境が整っている。この結果は、カナダがルッキズム改善のための社会的プログラムを展開し、教育の現場でも多様性の受容が促進されていることが影響していると考えられる。

4.結論

本調査結果を基にすると、社会的環境が個人の外見に対する意識に大きな影響を与えることが明らかである。カナダでは、ルッキズム改善の取り組みが社会全体で浸透しているため、個人が外见到過度なプレッシャーを感じず、自分らしさを尊重する傾向が見られる。一方、日本では、メディアや広告による美の基準が強く、見た目に対する社会的期待が若年層に大きな影響を与えている。このように、異なる社会的価値観や文化的背景が、美容意識やルッキズムの改善意識に影響を及ぼしていることが確認された。

5.おわりに

環境が影響を与えていることがわかった今、その環境を変えれば自分の美しさを尊重し、全員が楽しく生きれる社会を築けると考えた。今後はどのようにすれば環境が変わっていくかを探究したい。

6.参考文献・出典

Hyemin Lee, Inseo Son, Jaehong Yoon & Seung-Sup Kim

Lookism hurts: appearance discrimination and self-rated health in South Korea

25 November 2017

International Journal for Equity in Health

西倉実季（和歌山大学教育学部）「ルッキズム」概念の検討：外見にもとづく差別

和歌山大学学リポジトリ

8February 2021